ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.6 June 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

- 巻頭言
  別席とは
  ／永尾教昭 1
- 2019（令和元）年度「教学と現代」より
  「元の理」の生物学的アプローチ
  ／佐藤孝則 2
- 日本語教育と海外伝道（23）
  歴史の中の留学生②
  ／大内泰夫 4
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（21）
  倫理学の学問的境位と不条理を前にした人間的自由
  ／金子　昭 5
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（23）
  仏典翻訳の歴史とその変遷⑥
  ／成田道広 6
- 遺跡からのメッセージ（58）
  唐古・鍵遺跡の大型建物と豆谷和之さんの記憶
  ／桑原久男 7
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（10）
  5. コロンビアの体質 1
  ／清水直太郎 8
- ニューヨーク通信（5）
  文化協会を支える人々（2）
  ／福井陽一 9
- ヴァチカン便り（44）
  法王による新型コロナウイルスへの対応
  ／山口英雄 10
- 思案・試案・私案
  「碍」の字表記問題再考（7）
  ／八木三郎 11
- おやさと研究所ニュース 12

2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

別席とは

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

別席の話は、本来初めて天理教の信仰に触れる人のための話ではない。しかし、前号で述べたように、現在は事実上これが入信の儀礼のようになっている。

別席とは本来いかなるものか。これについては、論文「別席について」（中山さとゑ『みちのとも』昭和 32 年 6 月号～12 月号、天理教道友社）に詳しい。それによると別席制度は 1888（明治 21）年夏に始まっているが、その目的は「自らの心に本当の教理を治める事」であるという。そして、教理が治まり、天理教の信仰を生涯通る心が定まった者に、結果として「さづけの理」（病人に対する天理教の救済行為「さづけ」を取り次ぐ資格）が授けられる。このさづけの理を拝戴した者を一般に「ようぼく」と呼び、いわば布教師たる承認を得たと言えるだろう。

当初、別席を受講（一般に「別席を運ぶ」と言う）するには初試験と呼ばれた厳格な試験を通らねばならなかった。試験官は、真柱（記録には「会長様」と記されている）、事務所 1 人、先生方 1 人の計 3 人が立ち会った。先生方というのは、本部員（天理教の最高祭儀である「本づとめ」を勤める者）のことだろう。この試験に通ると、ようやく別席が受講できた。そして 9 回受講すると、さらに試験があり、それに通った者だけがさづけの理を拝戴することができた。整理すると初試験、別席、試験、本席（さづけの理拝戴）の順序を経ねばならなかった。そのため、途中で脱落する者も決して少なくなく、受講者の 3 分の 2 が試験に受からず、さづけの理をもらえないということもあったようだ。

その後、制度が改められ初試験、別席、本席、仮席となり、別席後の試験はなくなった。この仮席とは、さづけの理を頂いた者が、さづけの理の取り次ぎ方、取り次ぐ際の心構えなどについて 3 人の本部員から教えられるものである。

いずれにしろ、厳しい試験を通過して初めて別席は受講できたのである。確かに今でも別席話の冒頭では、国々所々で教理を聞いて納得した上で、さらに教理を深めたいから来たのであろうということが述べられる。つまり教理にある程度精通した者が受講したのだ。

その後幾度かの変遷を経て、現在は初試験に代わり「お誓い」となり、その気があれば誰でも別席を受講することができるようになった。このように変化していった一つの理由は、安易に流されたというより、むしろ教勢の進展であったと思う。天理教の信仰を求める人が著しく増えていく中で、布教師の側も改まってじっくりと教理を伝えるよりも、まず、ぢばに帰り別席を、ということになっていったのではないか。同論文の中で著者自身も「たすかって頂きたい故に、別席を運んで頂くのでありますから、当然その方は、お道には未知なのであります」と初心者が別席を受講すると述べている。

ただ、率直に言って初めて教理を聞く者にとっては、内容が高度すぎる。それでも今は、本部や教会で開催される各種講習会、行事や出版物を通して、あるいは教会長などのフォローで教理の理解を深めていっている。結果、別席受講がすなわち入信のための儀礼のような形になっていったと思う。

ただ国内の場合は交通機関も発達し、初心者にとってもそれほど高い壁ではない。しかし、海外の者にとっては、たとえ航空機の運賃が安くなってきたとはいえ、まだまだ異国、異文化圏に行くという精神的な壁もあり、いきなり初心者に、ぢばに帰り別席を運ぶことを勧めることは現実的ではない。そこで工夫がいると思うのだ。

「元の理」の生物学的アプローチ

おやさと研究所
天理自然・人間環境学研究室
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

2020年2月25日、私は「教学と現代」で、「『元の理』の自然科学的考察と今日的意義」と題して講演をおこなった。その全体概要については、担当者の金子昭所員がまとめているので、そちら（本誌、本年4月号）をご覧いただきたい。

この講演では、私の最終講義も兼ねるということから、生物学的および環境学的視点から「元の理」の動物学的解釈を試みた。そしてその解釈は、たとえば男雛型の「うを」と女雛型の「み」は、前者がサンショウウオ、後者がヤツメウナギであると結論づけた。このように、講演では「十全の守護」との関わりの中で、どのような意味をもっているかについて紹介した。

ただ、本稿をまとめる契機となったのは、講演後の質疑応答の中でいただいた一つのご質問、「外国では『元の理』をなかなか理解してもらえないのはなぜか？」に関してだった。海外での布教伝道のさい、天理教における最も基本的な拠り所である「元の理」の解釈に、その原因があるのではないかと考えた。

1．「元の理」に対するこれまでの視点

蔵内数太[1]が、「教団内は別でしょうが、教団外では誤解がおこる可能性があります。外国人などには『古記』による教理の理解は特に困難でしょう」と指摘していたように、「元の理」には確かに誤解を生じさせる要素があると考える。また、蔵内[1]は、「この『元初まりの話』については、それは象徴的に表現されたはなしであると、よくいわれています。勿論それで悪いのではありません。あれは文字通りに解釈されるべきものではなくて、深い意味を具体的な事物によって説いているものです」と述べている。加えて、「いわば目に見える着物を着せなければ、無形なものの伝達は出来ない」からだと考えた。

とくに、蔵内[1]は、10種類の動物たちと「道具衆」との関係を哲学的に考察し、「元初まりの話」については、「中山みきがみずから書いたものではなく、身近にいた人の聞き書きに由来するもの」として理解していた。また、「教祖はその書かれたものを見て『これでよいとは言われなかった』と言いますが、しかしそれで悪いと言ったのでもなかったようです。このことから考えますと、元初まりの話は、相手によって、時代によって、表現が変わって来る本質のものであり、或は内容が永久に展開して来るものであるかも知れません」とも述べた。これは、蔵内[1]によれば、「元初まりの話」は、相手によっても、時代によっても、表現方法が変わるのが本質だ、ということを意味する。可変性のある考え方である。

一方、深谷忠政[2]は、「元の理」は「人間の創造と生成が説かれるのは、単に発生的な考え方を以て、現在の人間界の一切の事象を時間的系列の中に編成しようとする進化的思想—近代的精神を特徴づける特性の一つである—としてではなく、たすけの理話として、説かれてあるという点に注目する必要がある」と述べた。また「元の理は生物進化の仮説としてではなく、飽くまでもたすけの理話（りばなし）としてよくかみしめて味い、腹におさめなければならない」ともいう。これは、「元の理」を進化論、進化思想、生命進化の視点から考察するのではなく、あくまでも「たすけの理話」として理解することの重要性について説いた。

深谷[2]の「元の理」は近代生物学の進化論的視点で解釈すべきでない、という考え方は、蔵内[1]の考え方とは異なっている。あえて言えば、前者は二者択一論的な思考であり、後者は象徴的表現を用いて全体の脈絡を推し量ろうとする思考だと考える。

いずれにせよ、本稿をまとめる契機となった「外国では『元の理』をなかなか理解してもらえないのはなぜか？」と、「ではどのように対応すればいいのか？」についての解答は、この中には見出せないのではないだろうか。たとえ象徴的表現であっても、「たすけの理話」であっても、とくに理詰めで理解しようとする人々には、納得してもらうのは難しいのではないかと考える。

私は、これまでの研究の中で、「元の理」に登場する動物たちは単なる象徴的なものではなく、むしろそれぞれの動物たちは、特性、本性を親神様によって見定められたからこそ、引き寄せられたと考えている。まさに「性を見定め」られたからである。それゆえ、たとえば「かめ」は、“かめ”でなければならないのである。そのことは、「性を見定め」られた動物たちの生態学的あるいは行動学的アプローチも重要であることを示している。さらに、「八千八度の生れ更り」を理解するためにも、進化論的アプローチを試みる必要がある。とりわけ、動物学を専門とする私としては、願ってもないアプローチである。

2．「元の理」研究の動物学的アプローチ

1993年4月、私は天理大学おやさと研究所に着任した。着任後は、教理研究を手掛けるとともに、前任地の博物館で手掛けていた両生爬虫類の生態学的研究と環境保全活動についても継続した。とくに、教理研究の中では『天理教教祖伝逸話篇』の環境学的アプローチのほか、『天理教教典』の「元の理」の生物学的アプローチも押し進め、教理と専門領域との兼ね合いを研究してきた。今回の「教学と現代」における講演は、それまでの研究成果を公にする願ってもない機会だった。

私は、『天理教教典』第3章に登場する水域性動物を分析して最初に気づいたのは、「うを」は魚、「み」は白蛇、「大龍」、「大蛇」のほかは「ふぐ」などの魚、「かめ」などの爬虫類で、私の学位（博士）論文の対象だった両生類が、まったく登場していなかったことを不思議に思った。動物の進化は魚類から両生類、爬虫類へと進化してきたはずが、なぜか「元の理」には両生類が省かれていたのである。むしろそのことが、私の「元の理」研究にスイッチを入れた大きな契機だったように思う。

私は、当時天理参考館で学芸員を務めていた上野利夫氏の協力を得て、『天理教教典』から「古記本」の分析へとベクトルの方向を変えた。そして18冊の「古記本」分析から、「うを」は両生類のサンショウウオ、「み」は脊椎動物でも進化的に最も下等とされる円口類（別名、無顎類）のヤツメウナギだったことを明らかにした[3][4]。

これは、脊椎動物の中で最も高等とされる人類（人間）への進化過程、すなわち円口類から魚類、両生類、爬虫類へと向かう一連の進化過程が、「元の理」の中に示されているのではないかという期待感を滲ませた。

なかでも、男雛型の「うを」を解析することは、「元の理」の動物学的アプローチの本質を理解することと考えた。

そこで、「うを」がサンショウウオを意味していたと解析したその過程を、以下に示す。

中山正善２代真柱[5]は、「古記本」のうちの１冊、桝井本を引用して、「うを」は「ぎぎよ」であることを紹介した。そこで私、佐藤は、「ぎぎよ」がほかの「古記本」の中でどのように表記されているかを調べたところ、「げいぎょ」に収斂された。[4]これによって、「ぎぎよ」は「鯢魚（げいぎょ）」であることが明らかになった。

そこで、江戸時代の「鯢」「鯢魚」について研究を重ねてきた碓井益雄の労作[6]から、その詳細が明らかになった。人見必大（ひとみひつだい）がまとめた『本朝食鑑』（1697 年）、貝原益軒が著わした『大和本草』（1709 年）、寺島良安が著した『和漢三才図会』（1713 年）、明治以前に４回も重版された小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（1803 年）、高木春山が描いた『本草図説』（1852 年）などの書物には、「鯢」「鯢魚」「山椒魚」の文字が表記されていた。これは、「鯢」「鯢魚」「山椒魚」はすべてサンショウウオのことであり、一般庶民にも広く知られていたことを示している。言い換えると、動植物に関する百科事典がこれほど多く出版され、重版もされていたことは、幕末の頃の一般庶民も、このような本に読み親しんでいたことを示す証左ではないだろうか。

では、江戸後期の一般庶民は、『本草綱目啓蒙』や『本草図説』などの書物を、どこまで読み込み、理解していただろうか。

斉藤泰雄[7]は、「江戸末期において、当時の日本はすでに庶民層を含めてかなり厚みをおびた識字人口層をかかえていた。学校教育の普及が低迷していた明治初期 20 年代半ばまで識字人口層は、江戸末期とあまり変らず、文部省の自署率調査によれば、識字率は最大で、男子で 50 ～ 60％、女子で 30％前後であったのではないかと推測」した。このように、幕末から明治にかけての日本人の識字率は、当時、世界で最も高かったことが窺える。このことは、幕末には武士のみならず畿内の農民や商人などの一般庶民は、普通に読み書きができ、書物もほぼ普通に読んで理解していたのではないかと考える。

深谷[2]は、「我々は泥海古記が如何なる人々を対象としてなされたかということを見落してはならない。それは大部分が、おそらく海を見たこともない、文字も知らないような、而も古昔（むかし）からの色々な慣習、口伝、俚諺（ことわざ）を持った大和の農民を対象になされたものである」と考えていた。しかし、むしろ、当時の人たちの多くは、文字をある程度自分で書き、読書もできていたのではないか、あるいは読み書きが不得手でも、知人の手助けを得ていたのではないかと考える。

３．「虫、鳥、畜類」の進化学的考察

『天理教教典』第３章「元の理」には、「その後、人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て」という表現がある。この部分を『天理教教典』の英訳版『THE DOCTRINE OF TENRIKYO』でみると、「After that, human beings were reborn eight thousand and eight times as worms, birds, beasts, and the like」と訳されている。ここでは、「虫」の訳は「worms」となっている。確かに「worms」は、昆虫の「insects」よりも広義の意味での「虫」ではあるが、むしろ、回虫など寄生虫やミミズというような“細長い小動物”、というイメージが強いように思われる。辞書によっては、「ミミズトカゲ」や「メクラヘビ」などの四肢が退化した爬虫類もこの「worms」の訳語となるが、それはミミズのような形態だからである。

実は江戸時代において、とりわけ江戸後期では、両生類や爬虫類は「虫」の枠組みの中に含まれていたのである。

江戸時代に広く読まれていた『和漢三才図会』（東洋文庫版）の「巻第五十二　蟲（虫）部」の説明の最初に、「蟲〔音は仲（チュウ）〕とは生物の微少なもので、その種類は大へん多い」と書かれている。これは、「蟲」は小型動物の総称を指していたと考えるべきである。

幕末の 1857 年、飯室昌栩（いいむろまさのぶ）は、「蟲」類を体系的に分類した本、『蟲譜図説』を日本で最初に上梓した。彼はこの本の中で、「蟲」を「卵生蟲類」「化生蟲類」「湿生蟲類」「鱗蟲類」の四つに大別した。狭義の「蟲」を表す昆虫だけでなく、広義の「蟲」、すなわち両生類（湿生蟲類）、爬虫類（鱗蟲類）などを含む 900 種以上の動物を、「蟲類」として『図説』の中に収録した。これは、幕末から明治にかけて、両生類や爬虫類も「蟲」の範疇に含められていたことを示している。

すなわち、「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残つた。」ということは、人間は、両生類・爬虫類（虫）、鳥類（鳥）、そして哺乳類（畜類）へと何度も世代交代を繰り返して、最後には雌ザル（人類へと向かう最初の“サル”）１匹が残った、という解釈となる。

これは、３億 6000 万年前、“陸上の住まい”を始めた両生類の祖先が、その後爬虫類、鳥類、哺乳類へと何世代にもわたって進化し、さらに 700 万年前には人類へと進化していったことを示唆している。この過程は、私たちが学校で習ってきた脊椎動物の進化を、まさに表現していることに他ならない。

深谷[2]は、「元の理は生物進化の仮説としてではなく、飽くまでもたすけの理話としてよくかみしめて味わい、腹におさめなければならない」と述べているが、生物学徒の一人として考えるのは、「元の理」は、むしろ生物進化の視点からも十分に理解でき、また納得できる「たすけの理話」ではないか、ということである。

いずれにせよ、理詰めで理解しようとする欧米人に対しては、むしろ「元の理」の中の「虫」の部分を十分に補足説明していく必要があるのではないか。そのことによって、結果的に「元の理」の理解度がさらに高められるものと確信している。

［引用文献］

(1) 蔵内数太（1979）『泥海古記について 中山みきの人間学』赤心社：138。

(2) 深谷忠政（1989）『教理研究 元の理 改訂新版』天理教道友社：159。

(3) 佐藤孝則（1996）「『泥海古記』に登場する生き物たち 1.“うを”についての動物学的考察」『研究報告会報』天理大学おやさと研究所（13）：35 ～ 47。

(4) 佐藤孝則（2000）「『泥海』―その発生学的意義」『「元の理」と地水火風～環境問題を考える～』天理やまと文化会議：69-83。

(5) 中山正善（1957）『こふきの研究 成人譜 その三』天理教道友社：159。

(6) 碓井益雄（1993）『イモリと山椒魚の博物誌 ―本草学、民俗信仰から発生学まで ―』工作舎：337。

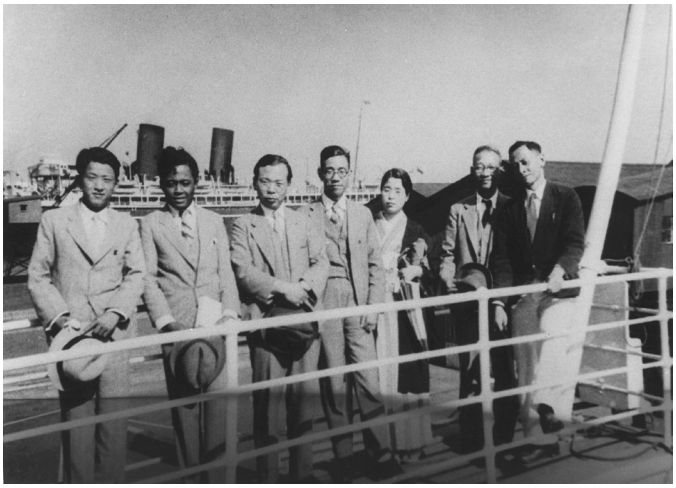
(7) 斉藤泰雄（2012）「識字能力・識字率の歴史的推移―日本の経験」『国際教育協力論集』広島大学教育開発国際協力研究センター 15(1)：51-62。

歴史の中の留学生 ②

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

日本からパラオへ

昭和４年７月26日、マルキヨクで佐藤嘉一と共に布教していた清水芳雄がデング熱で亡くなった。その遺骨を引き取りに天理教教会本部の山澤為次がパラオに向かった。当時、山澤為次は教会本部の海外伝道部第１課長であった。その際にマルキヨクの酋長アルクライが、エラケツを日本へ連れて行って天理教校別科に入れて、立派な布教師になってもらうように山澤にお願いしたようだ。それはエラケツを弟のようにかわいがっていた清水芳雄の思いでもあり、約束でもあった。そして山澤は、清水が残したマルキヨクの集談所をエラケツに継がせようと決め、昭和４年９月に彼を日本へ連れて帰ったのである。これがエラケツ来日の経緯であるが、来日したエラケツは清水芳雄の葬儀に参列したあと、神戸市垂水区の天理教名田分教会で天理教の教導を受けたようだ。その際、エラケツは、兵神大教会から清水芳雄の後任として派遣される高田敏造、近藤暢三郎の２名に、現地の事情や言葉の指導を行った（『東南アジア伝道資料調査考（6）』14～15頁）。そして天理での生活に関しては、山澤為次が世話取りをしていたようだ。写真はエラケツが３回目の来日中、昭和10年に神戸港で撮影されたものだが、ジャワ出身で天理外語に勤務していたラデン・スリアディ氏の帰国に際して見送りに行った時のものである。左から２番目がエラケツ、右から３番目、４番目が山澤為次夫妻である。



「山澤為次夫妻とエラケツたち」（天理教海外部アジア１課所蔵）

天理で学んだエラケツ

エラケツが天理に来ていたのはいつ頃なのか、またどういった人間関係を持っていたのか、全体像が分かりづらかったので、パソコンのExcelで年表を作り、資料にある事項を時系列に合わせて入力していくことにした。それで次第にわかってきたのだが、エラケツは昭和４年から昭和11年の間に３度、来日していたようだ。最も長く滞在したのが、第１回目の来日で、多くの日本人と友達になったようだ。上記の資料によれば、エラケツは来日後、天理小学校、天理中学校、天理教校別科で学んでいたということだが、昭和４年頃であるから、天理中学校は旧制の５年制の中学で、天理教校は天理教教師養成機関として本科が１年、別科が６カ月であったはずだ。本科はこの時期、まだ開設されておらず、昭和13年に修業年限２カ年で始まった（『天理教事典 第三版』632頁）。そうなると、小学校、中学校では編入という形で学んでいたのだろうかとも思えるが、定かではない。明治43年（1910）に生まれたことから考えると、民政時代、南洋庁施政時代にパラオで日本語も学んでいたと推定できる。おそらく昭和４年に来日した時には19歳くらいで、天理教校別科に入るまでの３年あまりの間、天理小学校、中学校で学んでいたことになる。小学生からは「エラケッちゃん」と呼ばれていたようで、そこから想像してみたのだが、明るく陽気な性格で日本語も話せて、歌が好きだったことから学校でも人気者だったようだ。クラスではどんな感じで過ごしていたのだろうか、気になるところである。

信仰の転換期

エラケツの最初の帰国に際して刊行された『エラケツ君送別記念文集』（エラケツ君送別記念文集刊行會：1933）の中には、彼が昭和８年２月に天理教校別科第49期を卒業し、６月に帰国するまでの友人たちとの思い出がたくさん書かれていて、本当にエラケツが人々から慕われていたことが窺える。陽気でスポーツや歌が好きで、語学に堪能で、詩人であり、宗教家であったようだ。この送別記念文集の最初にはエラケツが帰国に際して残した詩が載っているが、別れの悲しい気持ちがよく表れている。また文集の中では、懇意にしていた藤原徳治が次のように述べている。「彼氏が御地場に来てから本年で満４カ年に垂んとしています。僕が天理小学校へ参りましたのは昭和６年の４月でした。当時の彼氏は唯向学の道に一途邁進して居られた様だ。一昨年の９月彼氏が別科入学を志すに付いて私に話された。勿論僕は其の道をお奨め致しました。黒い教服に身を纏め意気揚々として未来の大教会長を想像されていたと存じます。（中略）彼は始め外語、小学校、教校に起居されていたのですが、病気以来、山澤先生の宅へ転住されたのです。」（『エラケツ君送別記念文集』18～19頁：原文のまま）エラケツは昭和７年８月より病気がちになり、山澤為次宅へ移り10月には重態になったようだ。その間、山澤から教理をもって諄々と教え諭されたことにより、11月には全快した。この経験から信仰的に大きく変わり、一時は絶望したが、たすかったことにより、生涯、天理教の道を通ると決心したようだ。別科卒業後は神戸へ布教にも行き、不思議なたすけをたくさん行ったようだ。この布教に際してお世話になっていたのが、神戸市の名田分教会である。そして昭和８年６月に山澤為次、本部青年中山慶一と共に横浜港発の近江丸でパラオに帰国した。彼は本当に歌が好きだったようで、帰国に当たり、港でも“天理青年、進めわれら”と天理教青年会歌を歌った。

今では、天理の町も海外から参詣に来る人や、天理教語学院や天理大学の留学生がいて、外国人がアーケードの中を歩いていることも珍しくはないが、当時はかなり珍しかったのではないかと思う。町の人の声掛けにも愛嬌を振りまき、流暢な日本語で陽気に応えていたそうであるから、人気者であったのは間違いないようである。戦前の昭和の初め頃のことであるから、明治・大正生まれの人々の記憶の中にはきっとエラケツの笑顔が焼き付けられているとも思う。

倫理学の学問的境位と不条理を前にした人間的自由

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

キルケゴールの読み方―哲学と現実

「哲学学」（哲学文献学 Philosophilologie）という言葉がある。哲学の研究が現代の諸問題を哲学的に扱うというよりは、哲学テキストの歴史的・文献的な研究になってしまっている姿を揶揄したものだ。大学で行われる哲学研究の大半が事実、このような哲学史学であり哲学文献学である。確かに、我々がそうした哲学研究から裨益（ひえき）されるところはとても大きい。しかし、哲学研究者がイコール哲学者というわけではない。キルケゴールの研究も同様の状況にある。それらは、デンマーク語テキストに即してキルケゴールを読み込んだ高度な学問的研究であり、学ぶところも非常に多い。しかし、キルケゴール学者がキルケゴールの良き友、理解者であるとは限らない。

哲学文献学的（フィロゾフイロローギシュ）な読み方は、あくまでテキストに即して「読み込む」（中へと入り込むように読む hineinlesen）という読み方である。しかし、そればかりでは、なかなかキルケゴールの思想を現代化することは難しい。そこで必要になってくる読み方とは、キルケゴールと対話しつつ、彼のテキストから現代の諸問題に生かせるものを「読み取る」（外へと引き出すように読む herauslesen）という読み方である。哲学はそれを学ぶ人間の血肉となってこそ生きてくるものであり、哲学はそれによって万人のための哲学となる。まして実存的な反省を絶えず読者に迫るキルケゴールの著作は、そこから人生を生きる糧となるものを読み取る herauslesen ことにより、自らの生き方の問題として受け止め、現代の諸問題に生かすことができるはずだ。

だが、哲学それ自体が現実問題に対して、直接役立つ処方箋を提供してくれるわけではない。哲学者が政治家として国を治めるというプラトンの理想国家なるものは、全くの幻想である。哲学はむしろ、自ら姿を隠すことによって、人々をその内面において支配もしくは指導することができる。時代の運命を決定するのは、その時代の思想を生んだ人間である。「カントやヘーゲルは幾百万の人びとを支配したが、支配された人びとはカントやヘーゲルを一行も読んだことがなかったし、自分たちがカントやヘーゲルの言う通りになっていたのだということさえ知らなかった[(1)]」と述べたのは、シュヴァイツァーである。これが現実の諸問題に対する哲学のあり方だと言えよう。

倫理学の境位―コロナという不条理に向き合う

哲学というものは自由な思惟の営みである。だから、これを支える根本信念がなければ、人間の思考は糸の切れた凧のように無限に拡散していくばかりだろう。とすれば、そのような意味で、哲学とりわけ実践の哲学と言われる倫理学には、思考を拡散させず主体的行動に収斂させ、自由の限界を確定させる前提を定め、また倫理学をして人間の実践と行動の哲学たらしめている生命線がなければならない。

キルケゴールは、『不安の概念』の序論の中で、こうした消息について示唆している。『不安の概念』は人間の罪を巡る心理学的分析を主題とする著作だ。ところが、罪の問題はどの学問的領域にも属さない。そこで心理学は、現実問題として罪があり得ることを、人間の心理分析を通じて明らかにする。しかるに、罪の理念は教義学が引き受ける課題である。教義学はこれを原罪から解明する。一方、罪がこのようにあることを前提としながらも、なおかつ自らが掲げる理想を現実世界へともたらそうとするのが、倫理学である。この理想は決して無際限の自由ではなく、どこまでも限界ある人間的自由である。以上のことから、倫理学は、人間が罪の規定の下に存するものとして、教義学を自らの限界確定のための前提とする。同時に倫理学は、この自由を自らの生命線として、すなわち人間性の証しとして確保し、これを探究するのである。

この著作における罪や原罪の扱いは、きわめてキリスト教的・キルケゴール的である。しかし、我々はなにもそうしたところに囚われる必要はないだろう。これをより一般的な表現で、根本悪とか不条理と名付けてもよい。いずれにせよ、それらは人間が否応なしに巻き込まれ、人間的努力で払うことができないものに他ならないからである。そしてその上で、人間は自らの自由を行使することが求められ、またそのようにして自由を発揮していくのである。

カミュの小説『ペスト』には、巨大な不条理ともいえるペストにさまざまな仕方で立ち向かう人々が登場する。献身的に患者の治療にあたる主人公の医師は、無神論者である。一方で、ペストという不条理の中で信仰を深め、神の手にすべてを委ねたイエズス会神父がいる。そのほか、一度ならずもペスト禍の町を脱出しようとしたが、心を翻して保健隊に志願した新聞記者などもいる。彼らは立場や思想こそ違え、ペストに立ち向かうという一点で、期せずして社会的連帯を果たしていくのである。悪の不条理性にはさまざまな関わりの仕方があり、絶望の狂気に陥った犯罪者すら重要な役回りを担う。『ペスト』は文学作品であり、唯一の「解答」は示さない。

疫病（ペスト）は猛威を振るい、数多くの人々の命を奪うが、人間の思いとは関係なくやがて衰滅していく。天災は人間の尺度とは一致しない。まさにそれが不条理であるゆえんなのである。ペスト禍に遭遇した人々は、「自ら自由であると信じていたし、しかも、天災というものがあるかぎり、何びとも決して自由ではありえないのである。[(2)]」つまり、人間は自由であって、自由ではない。自由を行使しようとしても、その自由は不意に絶たれてしまう。そんな時でも自由が試される。彼らの自由は、キルケゴール的表現で言えば、罪の規定の下にある人間的自由である。

ペストは現在、新型コロナと置き換えて考えることができる。我々はいま世界的規模で、この恐るべき疫災に直面している。一人ひとりが思想や立場の違いを超え、実践と連帯の生命線としてどこまで人間的自由を生かすことができるか。出口の見えないコロナ疫災のただ中、まさに倫理学において問われているのがこの問題なのである。

［註］

(1) シュヴァイツアー「文化の頽廃と再建」、『シュヴァイツアー著作集』第 6 巻、白水社、280 頁。

(2) カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳、新潮文庫（平成 16 年改訳版）、56 頁。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑥

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

変容と疑経（偽経）の関係

釈迦のことばの正統性を纏いながら、中国において独自に制作された経典は疑経（偽経）と呼ばれた。釈道安はそれらを「疑経録」にまとめ、次のように指摘した。

> 天竺の仏教教団にあっては、伝法の方法（外国僧法学）は皆師から直接相承していくものである。同じ師から10回あるいは20回と繰り返し伝授される。もし一字でも違えることがあれば師と弟子はともに推敲して、ようやく誤りを訂正するしきたりである。（中略）仏教経典が中国（晋）に来てからさほど時は経ていないにも関わらず、悪事を好む者は、砂を金と言い素知らぬ顔をしている。誤りを正すことがなかったならば、何をもって真偽を分かつのであろうか。（落合，2013：168）

釈道安はこのように述べ、正統性が疑わしいと思われる経典を峻別した。また、唐の智昇は『開元釈経録』に、次のように指摘している。

> 偽経とは邪見によって造られたものであって真経を乱すものである。大師（ブッダ）が影をお隠しになってから二千年になろうとして魔教が競い興り、正法はすっかり衰損した。頑愚の輩は悪見や迷心をもって諸経を偽造し、流俗を誑惑し、邪言が正義を乱している。何と哀しいことであろうか。（沖本，2010：294）

道安は疑経、智昇は偽経と呼んでいるので両者を合わせて「疑偽経」とすることもあるが、本稿では広義の概念として疑経の語を用いていく。経録の編纂目的の一つは、中国仏教からの疑経排除であり、釈迦の真の教えを希求した経録編纂者らの悲憤が見て取れる。

しかしながら、経録において真経と疑経を区別する判断基準の一つは、経典の出自がインド伝来かどうかであった。したがって、釈迦が直接説いたものではない大乗経典の漢訳もインド伝来のものとして排除の対象とはならなかった。また真偽の判断基準も経録によって相違があったようだ。たとえば『仁王護国般若波羅蜜経』は『出三蔵記集』においては羅什訳出の真経として区分されているが、『衆経目録』七巻では羅什訳であることへの疑念から疑経とされている（沖本，2010：296）。

いずれにしてもこのような疑経排斥運動は、経録編纂者らの努力によって続けられたが、数々の経録に示された疑経の数を比較すると、385年ごろ道安が記した「新集安公疑経録」では疑経の数は26部30巻であったが、510年ごろ僧祐が記した『出三蔵記集』「安公疑経録共」では46部56巻、730年に智昇が記した『開元釈経録』では、406部1,075巻が疑経とされている（沖本，2010：292）。経録編纂者らによる地道な努力に反して、疑経の数が増加していった背景にはどのような理由があったのだろうか。そこにはインドでうまれた仏教が、中国でどのように変容しつつ受容されていったかを理解する重要な手掛かりがあると考えられる。

疑経が多く作られていった理由は、それが一部あるいは多くの中国人にとって好まれ必要とされたからに他ならない。その事実は同時にインド伝来の仏典の直訳には物足りなさや、受け入れがたい要素があったということを間接的に意味する。

仏教の受容形態に現れた中国人の思惟方法の特徴を詳細に分析した中村元は、『東洋人の思惟方法』において、抽象的なものよりも具象的知覚を重視する傾向が強い点を指摘している。華厳宗の学者、圭峯宗密は、人間の根源的精神の状態を現すアーラヤ識に関して、清らかな精神を○、汚れた妄心を●の記号で表現し、○（真）と●（妄）の和合をもとにインド伝来の難解で抽象的な教理を視覚表象と陰陽により説明しようとした（中村，1988：34-37）。その理由として中村は、中国語の表意文字による言語表現と言語使用の規則に関する無関心さをもとに、その非論理性を示し、抽象的な思索を不得意とする特徴を論述している（中村，1988:48-55）。これはインド思想が対論によって論理的に発展してきた特徴と正反対であり、インド的な煩瑣な考察などは中国において受け入れられなかったようだ。

さらに、中村は中国人の思惟方法の特徴として、人間本位の現実現世主義的な傾向も指摘している。

> インド人は「有ること」(being, das Sein)をbhāva、「存在」「感情・欲望・苦楽感などをもった現実の人間として生存していること」（existence, Existenz）をbhavaという語を用いていいあらわしているが、シナ人はいずれをも「有」と訳している。両者は同じ語根に由来するからである。〔漢訳仏典では両者は区別されていない。〕さらに「有」という語の一般的用法を見ると、「有」は「存在すること」であるとともに、また「人間が所有すること」でもある。すなわち、すべてを人間中心に考えて、人間から切り離された「有ること」というものを考えないのである。（中村，1988：157-158）

これらの特徴は、抽象的な思惟よりも具体的・個別的で、より簡明な現世主義的傾向を示し、中国人の仏教理解においても明らかに現世利益の願望が顕著となることを意味するといえよう。祈祷・呪術による現世利益の願望が大多数の信仰動機であり、解脱に関しても果てしなく輪廻を繰り返しながら修行を継続するというインド的な時間軸を伴う循環的な志向性はなく、禁欲的な生き方もなじまない。つまり、中国人は仏教受容の過程で、現世での悟りもしくは即時的即物的救済の実現を求め、現実世界を肯定的にとらえる仏教へと変容させていったと考えられる。この傾向はインド仏教が示す特徴の対極に位置するものであり、思惟方法の違いが中国において仏教の変容をもたらした要因であると考えられる。

沖本は「疑経とは、経典という伝統の力を借りつつ、煩瑣な思想を単純化し、現世主義的な利害を重視するところに、その特性が典型的に表れている。この特性は大きく二つに分けられる。一つは世俗的利益の追求であり、一つは思想・実践の簡略化である。」（沖本，2010：299）と指摘し、中国における仏教の変容と疑経の関係に注目している。

中国における仏教理解の一形態が疑経として結実し、結果的にそれが人々の精神性に適応しつつ社会に浸透し、仏教受容の布石になったと考えられる。

［引用文献］
沖本克己「経録と疑経」『新アジア仏教史06仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010年。
落合俊典「疑教をめぐる問題 ―経典の物語化と改作」『大乗仏教のアジア』春秋社、2013年。
中村元『シナ人の思惟方法　東洋人の思惟方法Ⅱ』春秋社、1988年。

遺跡からのメッセージ（58）

唐古・鍵遺跡の大型建物と豆谷和之さんの記憶

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

田原本町に所在する唐古・鍵遺跡は、奈良県と京都大学による戦前の発掘調査により、弥生時代が稲作農耕文化の時代だと立証した歴史的な遺跡として知られている。さらに、1977年の第３次調査を契機に、奈良県と田原本町による継続的な発掘調査が実施され、近畿地方屈指の弥生時代の大集落遺跡だと明らかになった経緯がある。これまでの100次を超える調査では、集落を囲む大環濠や大型建物など、注目すべき遺構が数多く見つかり、土器や石器などの出土遺物も膨大だ。生活に密着する遺物のほか、青銅器の鋳造に関わる道具類や絵画土器など、特筆すべき遺物も多数見られる。長い道のりを経て、唐古池を中心とした約10万㎡の範囲が国史跡に指定されたのは、平成11年（1999年）１月のことだった。

唐古・鍵遺跡を発掘すると、最も多く見つかる遺構は、ゴミ捨て穴、湧水層まで掘り抜いた井戸、柱を立てたと見られる小さな穴＝柱穴などだ。弥生時代の一般的な建物は、ちょうど伊勢神宮の建築と同じように、柱を直接土中に埋めて固定する構造をもつ。こうした掘立柱の建物は、遺跡の発掘調査では、ふつう、柱穴だけが規則的に並んで見つかることになる。建物の地上部分は失われ、また地中に埋められていた柱も、あるいは再利用のために抜き取られたり、またあるいは朽ち果てたりするので、柱穴しか残らないのだ。柱穴内部に埋まった土は、周囲の土とは色調や質感が異なるので、精密な発掘調査によって柱穴の輪郭の検出が可能になる。こうして柱穴の存在が明らかになり、その並びを分析することで今度は建物の存在が突き止められる。唐古・鍵遺跡で２度にわたって発見された大型建物も、やはり、そうした柱穴が並んだ状態で確認されたのだが、どちらも２つの点で通常の建物と違っていた。１点目は、建物を構成する個々の柱穴の大きさ、建物全体の規模ともに、他と比べて、ずば抜けて大きかったことだ。２点目は、複数の柱穴で、柱の根元が抜き取られず、腐らずにそのまま残っていたことだ。

平成30年（2018年）春にオープンした唐古・鍵遺跡史跡公園には、国道沿いのエントランス近くに、ガイダンス施設を兼ねた遺構展示情報館が設置された。その建物内には、２号大型建物跡の発見当時の状況が再現され、柱穴、柱根、建物全体の大きさをリアルに感じることができる。情報館に入ってすぐ、見学者の目にとまるのは、通路近くの柱穴の脇に、発掘調査で使うさまざまな道具が無造作に置かれていることだ。土を掘るスコップ、土を削るジョレンやガリ、排土を運ぶテミ（手箕）、出土遺物を収めるコンテナ、高さや長さを測るスタッフ（箱尺）など、発掘現場でおなじみの道具に加え、柱穴や柱根の形状を手作業で細かく記録した実測図も並べられている。その実測図をよく見ると、方眼紙の上側には、唐古・鍵遺跡第74次調査のスタンプが押され、Pit104Eと、柱穴の番号が記されている。また方眼紙の下側には、「豆谷実測、99年11月５日」の表記があり、特徴的な筆跡から、紛れもなく、発掘現場で２号大型建物の柱穴のひとつを実測した図面の実物だとわかる。実測を行ったのは、今は亡き豆谷和之さん。私が学生時代、唐古・鍵遺跡の発掘調査にアルバイトとして参加していた時の後輩で、心のおけない長年の友人だった。

写真１　再現された大型建物跡の調査風景

唐古・鍵遺跡の発掘調査を通して、弥生時代研究の道を志した豆谷さんは、奈良大学を卒業後、山口大学の大学院に進んで研鑽を積んだ後、田原本町の文化財専門職員に着任し、唐古・鍵遺跡をはじめとした町内の遺跡調査に邁進した。唐古・鍵の大型建物を２棟とも発掘したのが豆谷さんで、平成11年11月、２号大型建物の超大型の柱根をクレーンで引き抜く作業をした際には、私にも声をかけてくれ、作業の様子を学生たちと一緒に見学させてもらったのだった。ウレタン材で保護しながら、慎重に引き抜かれた柱根は、まるで１トン爆弾のような形状で、豆谷さんの計測では、直径が実に83cmと、平城宮跡で用いられた柱材よりも太いものだった。また、柱材に用いたのが、平城宮跡ではほとんど見られないケヤキ（槻・欅）だったことも重要だ。巨大なケヤキ材を用いることに何か特別な意味があったのだろうか。大阪府の池上曽根遺跡で平成８年に見つかった大型建物跡の柱材は、ヒノキを用いていたので年輪年代法で伐採年代が紀元前52年と判明したが、唐古・鍵の場合は、ケヤキ材なので年輪年代法を利用することができなかった。考古学的に見ると、唐古・鍵の２号大型建物は、池上曽根と同じく、弥生時代の中期後半だ。

写真２　引き抜かれた大型建物の柱材と豆谷和之さん

さて、この２号大型建物が発見された第74次発掘調査は、平成８年（1996年）～平成16年（2004年）にかけて実施された範囲確認調査の一環で、豆谷さんは、その調査報告書の作成にも腕を振るった。その後、発掘調査現場を離れた豆谷さんは、今度は、史跡公園の整備事業の担当となり、力を尽くされたのだったが、道半ばの平成25年（2013年）12月10日、47歳の誕生日を目前にして、病のために帰らぬ人となった。今年の春学期は、私が担当する授業「弥生時代の考古学」もオンラインで行うこととなり、毎年、学生たちと訪れていた唐古・鍵考古学ミュージアム、唐古・鍵遺跡史跡公園の遺構展示情報館のどちらも、６月１日（月）まで閉館の状態となっている。今春は、豆谷さんの図面を目にすることができないが、こうして文章に記すことで、彼を偲ぶよすがとしたい。

5. コロンビアの体質 1

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

「コロンビアへの扉」というタイトルに従えば、コロンビアの一般的国情に言及しないというわけにはいかないだろう。最近、サッカーのワールドカップなどでコロンビアの認知度が上がったとはいうものの、過去のマイナスイメージ「麻薬、ゲリラ、治安の悪さ」がいつまでもつきまとっているのも事実である。

今のコロンビアを知って貰いたいという思いから、基本的資料を引っ張り出してきた。留学兼所員時代と現在の仕事を合わせて、コロンビアの滞在が 15 年を過ぎたので、その滞在体験を交えてコロンビアという国を描写したいと思う。

5.1 地域性と人間性

「コロンビア人は○○である」という一般化は大変難しい。それは日本人の場合も同様である。本連載の第 3 回で述べた「コロンビアの人種構成」は、主に人類学的な部分の構成を簡略的に提示したものである。ここでは、環境や地域の中で暮らしている人間、地域や習慣の多様性を考察することによって、コロンビア人を少し分析・解剖してみたい。当然のことかもしれないが、地理や地域の外面的な要素によって多様性が現れるだけではなく、その逆も真なりで、地方の習慣や文化が多様性を作り出し、形成してきている。多様な人間性が存在するのが普通であると考える。そのために、各地域性についてまず述べて、その中にも型もしくはパターンを説明する。

5.1.1 地域の多様性

＊地方と人間性：日本でも北と南では気候が異なる。その違いによって、人間の共通性があるのと同じように、コロンビアにおいてもその気候が人間形成において影響が強いし、また人種構成が異なる。コロンビアの面積は 1,141,748㎢、ちなみに日本は 377,915㎢だから、コロンビアの面積は日本の 3 倍強の大きさということになる。この国土を行政的は 33 の区分（県数は 32 県だが、ボゴタ首都特別地区を別として考える）である。2019 年時点で、全国で 1,099 の市町村が存在する。この国土を以下の 6 つの地域に分けるのが一般的である。

＊6 つの地域：

1）カリブ海岸地域（コロンビア北部地域）
2）太平洋岸地域（北部）
3）アンデス地域（コロンビアの中央部分）
4）アマゾン地域（南東部）
5）オリノコ地域（東部平原地域とも言う）
6）島嶼地域

この 6 地域であるが、上の区分は行政的ではなく、地理的、動物群、植物群、水路体系、土地の隆起、気候や文化、人種も含めた要素が根底になって分類されてある。当然ながら、各地域にはざっくりとした色合いがある。アンデス地域やオリノコ地域はスペインやメスティソ（白人と先住民の混血）の習慣が突出し、異種混合、すなわちスペイン・先住民の融合文化の地域である。一方、太平洋岸地域、島嶼地域、カリブ海岸地域は、黒人が極端に多く、その他、白人と黒人の混血（ムラート）も存在する。[(1)] そしてアマゾン地域は特に先住民の文化が根強い。

人間性を調べるのには地域の特色が有意義であるので、以下まず簡略的に地域を解説したいと思う。[(2)]

1）カリブ海岸地域

コロンビアの北部、カリブ海岸沿岸地域を指す。その範囲は 151,118㎢の広さがあり、ウラバ湾、パナマとの国境からベネズエラの国境のグアヒラ半島。南側は西及び中央アンデス山脈、北側はカリブ海である。気候は熱帯性だが、北東からの海風が吹いて気候は良い。チョコー県、アンティオキア県、セサル県、スクレ県、マグダレーナ県、グアヒラ県、コルドバ県、サンタンデール県、アトランティコ県、ボリバル県の 10 県にかかっている。

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/07/Mapa_de_Colombia_%28regiones_naturales%29.svg より

この地域の北東部、グアヒラ県に広大な砂漠地帯がある。産業でいえばそのグアヒラ県の塩、石炭産業が有名である。その他、農業、畜産業、漁業そして、地域の景観や風景が素晴らしいので、この地域はコロンビアの中でも観光業が重要な産業である。国立公園や特別自然保護地区も数多くある。また、この地域には先住民の保護地域があるのも特色で、いくつもの遺跡が存在する。コロンビア人の誰もが知っている、カリブ海地域の先住民の名称は「ワジュー (Wayuus)」と「コギ（Koguis)」である。沿岸地方で意外なのが、この地域にコロンビアで最も高い Sierra Nevada de Santa Marta (シェラネバーダ・デ・サンタマルタ) という山があることだ。その高さは 5,775 m。

2）太平洋岸地域

コロンビアの西部、北はパナマとの国境付近からウラバ湾を抜け、南はエクアドルの国境までの海岸地域である。領域の広さは 83,170㎢。この地域の東側は西アンデス山脈、アンティオキア県、バージェデルカウカ県、カウカ県、ナリーニョ県、チョコー県の一部が含まれている。気候は雨量が多いため、年間の湿度が非常に高いということである。ちなみに年間降水雨量の平均が地域全体で 4,000㎜、また 12,000㎜の地区もある。ちなみに日本で一番降水量が多い県である高知県でも年間 3,600㎜ほどであるから、いかに多いか理解できるだろう。またこの地域の特徴は密林、山が多い、河川が多い、海岸線など地理的な変化に富んでいることだ。

人種構成に特徴があり、圧倒的に黒人が多い。92％が黒人、5％が白人で、3％が先住民である。[(4)] 92％の中にはムラート（黒人と白人の混血)、サンボ（黒人と先住民の混血）も入っている。したがって、アフロ系コロンビア人という名称で呼ばれている通り、この地域はとくにアフリカの文化、音楽、食生活が色濃く残っている。楽器ではアフリカ起源とされる「マリンバ」や、アフリカの音楽にとって欠くことできない打楽器類の演奏が盛んで、パーカッションや太鼓での激しいリズムが特徴。「太平洋岸の音楽」(música del Pacífico) と言えば、この種の音楽、つまりアフリカを起源とする音楽を指している。

［註］
（1）https://www.colombian.com.co/vida/regiones-de-colombia/
（2）Atlas de Colombia, Editorial Educativa KingcolorS.A.2009 参照
（3）http://grading.jpn.org/SRB02402.html 都道府県格付研究所参照
（4）https://www.colombian.com.co/vida/regiones-de-colombia/

ニューヨーク通信（5）

文化協会を支える人々（2）

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

活気に満ち溢れ賑やかだった街並みも、今はひっそりと静まりかえり、まるで別の世界に来たような錯覚に陥る。新型コロナウイルスの世界的流行（パンデミック）が発生し、その中でも、ニューヨークは感染者数、死者数ともに世界で最も多くなってしまった。しかし、そんな状況の中でも人々は、助け合いながら、生活している。20年前に起きた9.11世界同時多発テロの時でもそうだったが、いつもは冷たそうに見えるニューヨークの人々も、優しさを取り戻し、他人を思いやりながら、街には温かい雰囲気が漂っていた。今も、みな一つになり、力を合わせてこの難局を乗り越えようとしている。パンデミック前の状態に完全に戻ることはもうないかもしれないが、新しい未来に向かって歩みはじめている。

レストラン「おめん」と常連さん

そんな中、4月13日、ニューヨークタイムズ紙は、家族をテーマに特集を組んだ。この特集記事として、文化協会運営委員の品川幹雄さんが経営するレストラン「おめん」のことが掲載された。創業当初から著名な常連が多く、まるで家族のように集まることからスポットが当てられたようだ。

京都に本店を持つレストラン「おめん」は、日本の優れた和食文化を世界に伝え、食を通して社会に貢献したいという創業理念のもと、1981年、芸術、文化の中心地であるニューヨークに支店をオープンした。それ以来、ニューヨーカーはもとより、世界各国から集まる多くの人々に愛され、家族的な空間を提供するかけがえのない場となっている。コロンビア大学の故ドナルド・キーン先生もその一人だった。

記事は、音楽家のパティ・スミスさんが筆者となり、俳優のリチャード・ギアさんをはじめ「おめん」の常連さんたちが集まり、語り合いながら特集が組まれた。

パティさんは、「レストラン『おめん』は、ニューヨーク・ソーホー地区の宝物のような存在として発展してきた。そこには、ニューヨークの昔ながらの雰囲気や親族のような温かさ、共有感がただよう。オープン以来、芸術家や俳優、作家、ファッションデザイナーたちに愛され、40年という時の流れに大きく変貌を遂げるニューヨークの中で、変わらずそこにいてくれる」と語っている。

スコット・マーブルさん

そんな「おめん」の常連が紹介してくれたのが建築家のスコット・マーブルさんだ。当時、コロンビア大学で教鞭をとる若手設計士で、1990年、文化協会設立に向けて内装デザイン・施工に携わってくれた。文化協会の設計にあたり、同じく設計士のカレン夫人と共におぢばに帰参し神殿を丹念にまわり、おぢばの雰囲気を学んだ。そして、おぢばの様子を醸し出すような設計も取り入れてくれた。

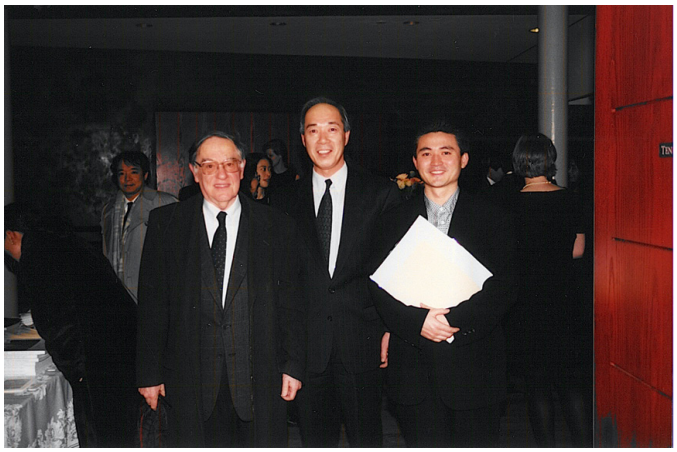


写真１　左からドナルド・キーン先生、奥井俊彦主任（当時）、品川幹雄運営委員　文化協会にて1999年

写真２
スコット・マーブルさん

おぢばを訪れている時、ちょうどなら100年会館の設計デザインが公募されており、応募したところ最終選考まで進んで、その作品は、長くニューヨーク近代美術館に展示されていた。

文化協会の内装工事は、ユニオン（労働組合）のピケッテング（工事反対デモ）に遭い、なかなか進まず、組合本部にも足を運んだりしながら、たいへん苦労して工事が進められた。スコットさんの辛抱強い尽力もあり、翌91年、無事に完成した。その後、95年には、建築専門誌 *Interias* で「世界で活躍する優秀な40歳以下の設計士40人」に選ばれて、ますます頭角を現すことになった。

2000年、文化協会は現在地に移転。その時も内装を担当してくれた。それは、その年の最も優れた内装デザインに与えられる「インテリアデザイン賞」を受賞した。

文化協会は、非常に才能のある方々とのご縁をいただき、誠に幸運なことだ。私たち素人だけでは、とても叶わないことも多く、ご存命の教祖が先廻りしてお働きくださっているのを強く感じている。

2008年には、ニューヨークセンターの神殿が竣工した。この時は、予算が限られているにもかかわらず、スコットさん夫妻が自ら神殿の設計を担当してくれた。そして、この神殿は、21世紀の最初の10年間に建てられた代表的な建造物の一つとして、書籍 *Guide to Contemporary New York City Architecture* にも紹介されている。

オンライン授業

感染拡大の長期化に伴い、文化協会も一時閉鎖を余儀なくされ、現在は日本語教室の大人クラスも子供クラスも、オンライン授業を行っている。どれだけの人が戻ってきてくれるかを心配したが、およそ8割の生徒が登録し、オンラインで復学している。これは、日頃から先生たちが真心で交流を続けてきてくれたお蔭と感謝している。

文化協会で長く日本語を勉強している生徒の中には、スタッフの皆さんは家族みたいに感じるとか、ここに来ると心が安らぐと話してくれる方々もいる。

久しぶりにコンピューターを通して再会し、お互いの無事を喜び合ったり、子供クラスではクラスの再開を喜んでくれている親御さんもいる。子供同士も久しぶりに会って笑顔で手を振りあう。こんな喜びの風景が画面を通して映し出されている。

今の難局を乗り越えながら、文化協会もニューヨークの人々にとって、かけがえのない家族のような温みを提供できる場として成長していきたいものと願っている。

ヴァチカン便り（44）

法王による新型コロナウイルスへの対応

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

イタリアでの感染拡大とその対策

昨年末に中国で発生した新型コロナウイルスは、今年1月の半ば頃からイタリアでも話題に上がるようになった。しかし、その当時は中国国内における感染拡大、死亡者の増大の状況をメディアで見ながら、大変なことが起きているのだと傍観していた。そうした状況はイラン、韓国へと飛び火して行った。中国から遠く離れたイランで、なぜそんな感染者が増加したのだろうかと思っていた。２月に入り、イタリアにも中国人旅行者夫妻の感染が確認された。彼らはスパランツァーニ隔離病院に入院させられた。それでもまだ、他人事のように思われていた。

しかし、やがてイタリア人の中にも感染者が増え始め、ようやく人々は自分たちの問題だと自覚するようになった。３月に入ると、イタリア全土に感染が広がり、緊急対策が必要となってきた。まず、託児所、保育園から学校、大学などの教育機関が全面的に閉鎖された。子供たちは、学校が休みということになり、初めは万歳と手を挙げて喜んでいたが、あまりにも休みが長期化して、心配事が続々と現れてきた。

カソリックの世界も事態が一変した。日曜日のミサが中止となり、教会は、個人の祈願者を入れるために、門が開いているだけだった。３月11日には、イタリア政府によるコロナウイルス感染拡大防止に対処するため、第１回目の国民に対する規制事項が発表された。これによって、日常の生活必需品を扱っている店、つまり、食料品店、スーパーマーケット、薬局、病院､開業医以外はすべて閉鎖となった。また､一般企業の事務所、工場も閉鎖になった。

一般市民も上記の店に行く以外は、政府が作成した「自己行動責任証明書」に必要事項を記入し、それを持って行動する必要があった。外出に際して、警官に呼び止められた時には、その証明書を提示しなければならなかった。警察が不適当な外出だと判定すれば、罰金、最悪の場合には禁錮の罰則が科せられる。そのため、多くの人は家にいるしかなかった。

ローマ法王による祈り

そんな状況の中、カソリックではローマ法王が中心となり、新型コロナウイルスの終息を願って、さまざまな祈りが行われた。法王は不安の度を増したローマ市内さらには世界全体の平安を祈願して、市内の教会に足を運び、自ら祈りを捧げた。３月15日、聖マリア・マジョーレ教会に赴いて聖母マリアに祈りを捧げ、そのあと聖マルチェッロ教会へと向かった。ヴェネツィア広場に到着後、不自由な足で200メートルほど歩いて、聖マルチェッロ教会に入ったのである。この教会には十字架像が祀ってある。時は遡って1522年。ローマにペストが蔓延し、人が次々と倒れ、死んでいった。その時、聖マルチェッロ教会の十字架像を持ってローマ市内を巡回したところ、ペストが終息したと伝えられている。法王はその十字架像の前で、新型コロナウイルスの終息を祈願したのである。

３月25日正午、法王は聖ピエトロ大聖堂で新型コロナウイルスの終息を祈った。誰も集まってはいけないということで、法王はガランとした広い聖ピエトロ大聖堂でただ一人祈った。「アッシジの精神」に則り、私も天理教の人間として、同時刻に祈った。また天理教教会本部の祈りにも心を合わせて祈りを捧げた。

さらに３月27日午後６時、夕闇も迫り、大雨の降る中、無人の広い聖ペテロ広場で、法王は、新型コロナウイルスの終息を願うとともに、カソリック教徒の結束と信仰心を一層強固させるように訴えた。この時刻、大ローマ布教所はちょうど夕勤めの時間帯だったので、一緒に祈った。

現在までのローマの動き

新型コロナウイルスの感染拡大は、ちょうどカソリックの四旬節に当たる時だった。キリストが十字架にかかり、死んだ日の儀式は「Via Crucis」といって、毎年多くの信者、観光客を集めて、ローマのコロセウムでキリストにならって、選ばれた人たちが十字架を背負って歩く儀式が行われる。しかし、今年は人が集まることは禁止されていたので、復活祭の２日前の４月10日、ヴァチカンの聖ピエトロ広場で「Via Crucis」の儀式が行われた。広場は人々の参集は禁止。ほかに誰もいない中、７、８人が十字架を交代しながら支え持って練り歩き、13カ所設けた場所で立ち止まり、そのつどキリストの十字架を背負う苦悩を表していた。

法王は、復活祭前日の説教の中で、「確かに今は、日ごとに恐怖が広がり、希望が失われているように見えるかもしれない。しかし、イエスは違う。彼は墓からでも命を呼び戻すことができる。」と述べ、信者たちを励ました。

４月25日、国民に対する規制の第２回目として首相の発表があった。経済的な困窮に陥った一般商店の開店、レストランやバール（飲食店）の開店、外出の自由（ただしマスク着用、人と人の間隔距離は１メートル確保）などがその中に含まれる。しかし、キリスト教の集会に関しては一言も触れられていない。日曜日のミサも禁止されたままだ。ただ、ミサの再開は、レストランやバールと同じ５月18日以降になると見られている。ただし、社会的距離はとること。

信教の自由、集会の自由は宗教にとって重要なことだ。世界には多くの教会、モスク、寺院等がある。これは、一般の人々、信者が集まり聖職者とともに、神に祈りを捧げるところだ。それゆえに世界には多くの信者を収容できるように、大きな教会、寺院が存在する。今回のように、国家の要請によって、宗教的集会を中止、延期せざるを得なかったことに関して、一面には宗教の弱さを垣間見た印象がある。その背景には、韓国の新興宗教の集会における集団感染問題が影を落としているようにも思われる。

新型コロナウイルスの蔓延によって、多くのカソリック信者も感染している。彼らを励まし助けるために、多くの神父が寄り添い、全身全霊を捧げた。しかし、自らもウイルスに感染し、命を落とす神父が続出したのだ。４月11日現在、命を落とした神父は130名を超えた。これは一種の殉教と見られている。

「碍」の字表記問題再考（7）

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎　*Saburo Yagi*

窮民救済制度

明治政府が定めた窮民救済制度に1874年（明治7）に制定された「恤救規則」がある。今でいう生活保護法である。幕末以降の欧米列強に対応するべく、富国強兵、殖産興業に力を注いだわが国はいっぽうで、資本主義の社会構造がうみだす負の部分に対処することを余儀なくされた。救済の制度は古来より記録に残されているが、幕藩体制の江戸時代においてもいくつか存在している。8代将軍徳川吉宗の孫にあたる松平定信の定めた1792年（寛政4）の「江戸七分積金制度」などはよく知られている。

今回は明治政府の定めた恤救規則をはじめとして、戦前の公的扶助制度において、その対象者の表記がどのように記されているのかを見ることにしたい。

恤救規則

済貧恤窮ハ人民相互ノ情誼ニ因テ其方法ヲ設クヘキ筈ニ候得共目下難差置無告ノ窮民ハ自今各地ノ遠近ニヨリ五十日以内ノ分左ノ規則ニ照シ取計置委曲内務省ヘ可伺出此旨相違候事

一　極貧ノ者独身ニテ癈疾ニ罹リ産業ヲ営ム能ハサル者ニハ一ケ年米一石八斗ノ積ヲ以テ給与スヘシ但独身ニ非スト雖モ余ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身癈疾ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給与スヘシ

一　同独身ニテ七十年以上ノ者重病或ハ老衰シテ産業ヲ営ム能ハサル者ニハ一ケ年米一石八斗ノ積ヲ以テ給与スヘシ但独身ニ非スト雖モ余ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身重病或ハ老衰シテ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給与スヘシ

一　同独身ニテ疾病ニ罹リ産業ヲ営ム能ハサル者ニハ一日米男ハ三合女ハ二合ノ割ヲ以テ給与スヘシ但独身ニ非スト雖モ余ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給与スヘシ

一　同独身ニテ十三年以下ノ者ニハ一ケ年米七斗ノ積ヲ以テ給与スヘシ但独身ニ非スト雖モ余ノ家人七十年以上十五年以下ニテ其身病ニ罹リ窮迫ノ者ハ本文ニ準シ給与スヘシ

一　救助米ハ該地前月ノ下米相場ヲ以テ石代下ケ渡スヘキ事

この恤救規則は、貧困者や70歳以上の労働不能の者、障害者、病人、児童などに一定の米を支給することを定めた慈恵的な、そして制限扶助的な救貧制度である。それも独身の者のみを対象とするものであった。家族で扶助が可能な場合は、親族扶養を優先とし、それを第一義の原則としている。そして、近親内での扶助が無理な場合は、「人民相互ノ情誼」で相互扶助を謳っている。この人民相互ノ情誼とは、政府が主に関わることではなく、あくまでも近親者、地域共同体の人々でお互いに救けあうことを意味している。まずは自助であり、それが無理なら共助、それもできない場合に限り最終的に公助で救済するというものであった。この恤救規則は前々号で述べた養老律令の「鰥寡條」に「救済は近親者もしくは地域共同体で行うこと」という文言があったが、この考え方がわが国の救済原則として踏襲されているのである。恤救規則においての障害者の表記は「癈疾」が用いられており、1カ所のみである。養老律令で示された中度の身体障害を示す癈疾の文言を用いている。また、その対象範囲と条件としては「癈疾、老衰、疾病、幼弱者、又ハ失業ノタメ其身窮迫ノ状態ニアルモノ。」と定めている。

窮民救助法案

恤救規則は、1929年（昭和4）に「救護法」に改称、改正されているが、それまでに何度も救貧に関する法案が帝国議会に提出されている。その一つが、1890年（明治23）の窮民救助法案である。記された対象者は次の通りである。

不具癈疾長病不治ノ疾病重傷老衰其ノ他災厄ノ為メ自活ノ力ナク飢餓ニ迫ル者養育者ナキ孤児及引受人ナキ棄児迷児

この法律では、障害者、不治の病、重傷を負った者、老衰、その他の理由で自活ができず、飢餓状態にある者を救済の対象としている。ここで示された「不具癈疾」が障害者を意味する言葉である。さらに、「窮民ノ意義及分類」の項目では「癈疾者トハ十四歳以上ノモノニシテ終身治癒ノ見込ナキ身心ノ故障ニ依リ労務ニ服シ得ザルモノヲ云フコト」と癈疾者の定義を示している。

救貧法案

この法律は、1902年（明治35）に「貧民救助労働者及借地人保護ニ関スル建議書」として帝国議会に提出されたものである。ここでは次のような記述がある。

茲ニ貧民ヲ救助スル一定ノ法律ヲ設ケ不具癈疾等ニシテ実際生活ノ方法ナキ者ハ之ヲ救助シ一方ニ於テ惰眠浮浪ノ徒ヲシテ自主独立ノ途ヲ得セシムトイフガ本案大体ノ精神

などと法案提出の理由が述べられている。このなかで救済対象者に障害者を挙げ、前述の窮民救助法案と同様に不具癈疾の言葉で表している。

救護法

明治、大正時代を経て昭和の初期に新たな救貧に関する法律が求められ、制定されたのが1929年（昭和4）の救護法である。大正年間の関東大震災や世界恐慌などで貧困者が急増し、従来の法律では対応できず、英国、ドイツ、フランスなど諸外国の救貧法を参考にして、この法律はつくられている。

救護法の制定に向けて1927年（昭和2）に答申された「一般救護ニ関スル体系」のなかで、救貧制度の大綱が縷々示されている。そのなかで「癈疾、老衰、疾病、幼弱者ヲ以テ救貧ノ客体トシ其ノ資格範囲ヲ拡張スルコト」と対象枠を拡大することを定め、加えて「老年、疾病、癈疾者ニ付キテハ漸次社会保険制度ヲ確立シ又ハ拡張スルコト」という記述があり、救済とは相互扶助であり、ゆくゆくは社会保険制度とするシステムの構築が説かれているのである。

救護法の第1章の被援護者の項目では、第1条でその対象者の記述があり、次の通りである。

一　六十五歳以上ノ老衰者
二　十三歳以下ノ幼者
三　妊産婦
四　不具癈疾、疾病、傷疾其他精神又ハ身体ノ障碍ニ因リ労務ヲ行フニ故障アル者

救護法での対象の範囲は4種類と定めているが、四に示されたなかで「身体ノ障碍ニ因リ」という表記が用いられているのである。これまで検証してきた法律文書では、個々の障害を示す言葉で表現されていたが、救護法では「身体の障碍」という今までとは異なる、新たな表記が用いられ、そこに「碍」の字が使われているのである。

第2次世界大戦前は「障害者」ではなく「障碍者」という表記であり、そのことに立脚して本来の表記である「障碍者」に戻すべきであるという意見の根拠をここに確認した。

［参考資料］
寺脇隆夫『救護法成立・施行関係資料集成』ドメス出版、2007年。

天理大学おやさと研究所

2020 年度公開教学講座

信仰に生きる　『逸話篇』に学ぶ（６）

ご来場くださる皆様へ

新型コロナウイルスの影響により、

日程を９月からの開催に変更しました。

ご理解くださいますようお願い申し上げます。

第１回：　９月 25 日（金）
永尾教昭所長　75「これが天理や」

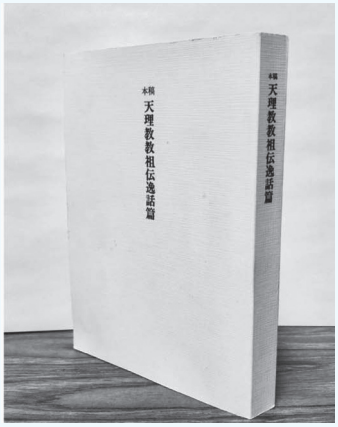
第２回：　10 月 25 日（日）
佐藤孝則研究員 77「栗の節句」

第３回：　11 月 25 日（水）
岡田正彦研究員 88「危ないところを」

第４回：　12 月 25 日（金）
澤井真研究員　93「八町四方」

第５回：　１月 25 日（月）
八木三郎研究員 106「蔭膳」

第６回：　２月 25 日（木）
堀内みどり主任 103「間違いのないように」



場所：天理教道友社６階ホール

時間：午前 10 時～ 11 時 30 分

＊お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローカル天理
第 21 巻　第６号　（通巻 246 号）
2020 年（令和２年）６月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan